

語らぬ言葉

——メルロ＝ポンティを読むブランショ^①

小林 徹

詩友独留真死友

——菅原道真「読楽天北窓三友詩」

1、はじめに

こうして、ひとり、栄光からも成功からも切り離され、自らの無能力だけを証明するかのように、誰にも読まれるあてのない文章を書いているとき、ある署名のもとで、ある依頼を受け、いくつかの制約を確認しながら、手元に浮かぶ言葉をつなげては解きほどこき、それらが別の言葉へと移っていくのを眺めているとき、胸中に去来する虚しさの感情には、それなりに謎めいたところがある。馴染みのものであると同時に、誰のものとも知れぬこれらの言葉は、どこから生まれてくるのだろうか……。目前に浮かぶテキストを反芻し、外延のはっきりしない諸々の観念を手当たり次第に重ね合わせながら、私は、そこにあたかも一本の筋道が存在していたかのように、ひとまとま

りの文章を寄せ集めていく。私が書く前に、文章がそこにあつたのだ。こうして砂漠の中で流れ去る砂をかき集めながら、ようやく発見された微かな模様に、やはり僅かながらも意味と呼べるものを期待することができる。私はいつか、書き足りないという想念すら抱きながら、喜びとは言わないまでも、少なくともある程度の確信を抱きつつ、この文章を書き終えるだろう。それはすぐさま私の手を離れ、顧みられることのない空虚な文字として何処かの書庫に保管されるだろう。ともかく、どうにか小さな扉を一つくぐり抜けたわけだが、記憶に残らぬこの歩みは、いつ始まったのだろう。私はいつ書き始めたのだろう……。

書くとはどのような営みなのか。語るとは何か。意味とは何か。モーリス・メルロ・ポンティの哲学は、言語という象徴的システムを支えるものとして、身体的な実存における言葉の発生に遡る。モーリス・ブランショは、「始原の沈黙」に立ち返ろうとするこの試みに、文学的言語が向かうのと変わらぬ方向性を読み取る。両者は、誰のものでもない言語そのものの運動に接近しようとする点において、重なり合い、交叉している。しかし、今まさに語る者の口の端に浮かびつつある言葉を捉えようとする哲学者と、その言葉において執拗に消え去りつつあるものに付き従おうとする文学者は、出会いの中で、すでに袂を分かつているようにも見える。本論稿では、書くことを巡るブランショの独自の考察を、彼の評論活動の開始点に遡りながら考察し（第2節、第3節）、メルロ・ポンティの言語論との接点と乖離点について議論する（第4節、第5節）。「語らぬ言葉〔parole tacite〕」という表題は、メルロ・ポンティの概念である「語る言葉〔parole parlante〕」を反転させたものだが、そこに格別の野心はない。概念の位置を僅かにずらすことによって、ブランショという対話者の言葉を少しでもはつきりと聴き取るための場所を開けているにすぎない。とはいえ、この言葉遊びめいた標識は、本来展開されねばならない広大な問題領域を指示するものでもある。本論稿は、野生状態のまま広がっているこの領域に向かうための小径の一つにすぎない。

2、危機

書くとはどのような営みなのだろうか。意味はどのように生み出されるのだろうか。偉大な作家たちが新しい何かを創造したことは明白だ。とはいえ、何を創造したかはそれほど明白ではない。ひとは生み出された作品の秘密を探る。説明し、解明する。しかし作家は、定義された美や作家像を乗り越えることによってしか書くことはできない。何ものでもありえないからこそ、文学は文学たりえるのかもしれない。あるいは、自己を否定することによってのみ文学は実現されるのかもしれない。いずれにしても、文学には、理論化しうるほどの実体性が備わっていると同時に、そうした言語化された合理性を逸脱する不安定な要素が、本質的な仕方で浸透していると言えるだろう。文学は——おそらく言語そのものも——、危機と切り離せないのだ。現代ほど、それを感じさせる時代はない。一九二五年以来『NRF（新フランス評論）』誌の編集長としてフランス文学界を牽引していたジャン・ポーランは、一九三六年に同誌に発表された『タルプの花』⁽²⁾においてこう述べている。

おそらく文芸は、これまでいつも危険を冒しながらやって来た。「……」しかし、「熟練」や「完璧」というものが、ほとんど技巧や空虚な規約を指し、「美」や「妙技」や、果ては「文学」が、何よりも「やってはいけないこと」を意味するような時代の危険性ほど陰險なものを私は知らないし、このような時代の呪詛ほど下劣なものを私は知らない。⁽³⁾

自らの言葉に対する懷疑、文学という営みに対する懷疑を抱かずに書く作家など存在しないだろう。しかし、この懷疑が文学そのものの否定にまで至るとき、それは個々の作家の真摯さを越えて、書くという行為を窒息させる

時代全体の危機的な雰囲気となる。作家は、月並みな語句を避けようとするあまり、何も語れない自縄自縛の状態に陥っていく。「月並み」「自縄自縛」といった常套句を削除する手が、文章全体に抹消線を引くことになる。作家の言葉は独創的でなければならない。誰かの手垢にまみれた言葉を用いてはならない。「怠慢とか安易という非難が、紋切り型に頼る作家の上にのしかかってくる」⁴。常套句は、独自の世界を描くという作家の自由の放棄に他ならないのだ。こうして、独創的な作家と修辭を乱用する作家とが厳しく区別され、後者が断罪されることになる。文学が自己に向ける批評的まなざしが、「テロル〔恐怖政治〕」として現れるのである。自らが用いる言語を飛び越えてその精神に価値を見出すこと、「言語は思考にとって本質的に危険なものであり、見張っていなければいつも思考を抑圧しようとしている」と考えること、つまり「言葉嫌」〔misologue〕こそが、テロリストの定義である⁵。

しかし、このような暴力は正当なものだろうか。そもそも独創性と修辭を区別することなど可能だろうか。精神と物質、思考と言語が別々に存在しているというのは、私たちが知らぬ間に陥っている錯覚ではないだろうか。ある美しい文章が存在するとき、それを書いた者のうちにあるのが紋切り型への服従なのか、あるいは習慣化した規則の自由な使用なのかは、誰にも判定できない。文学的創造性を言語の外部に求めるのではなく、言語そのものの内部に、「それを見るためには目を塞がねばならない」⁶言葉の力のようなものを見出さねばならないのではないだろうか。諸々の方法を観察したり根拠を探索したりする前に、言語使用において自らの本質を見出していくべきなのだ。月並みな表現を避けるということは、その言葉を削除することではなく、新たに作り直すということである。「常套句は、つねに、いかに陳腐なものであるとも、それを述べる者が発明したものかもしれないし、その場合、そこには生き生きとした新しさの感覚さえ生じているのだ」⁷ということに気づかねばならない。あまりに自然で、その存在を意識させないときにこそ、言語は最も自由に駆使されていると言える。その意味では、目を瞑って読み飛ばされる常套句という場所において、私たちは「言葉を生み出すための恒常的で執拗な試み」⁸に立ち会っている

のであって、言語や文学が例えば「月並み」なものとして認識されるとき、そしてそれを排除しようとする機制が働くとき、私たちはそうした創造的な場所から離れ、解除しがたい「精神の錯覚」⁽⁹⁾のうちに身を置いているのである。重要なのは、紋切り型を単純に削除することではなく、その発生に立ち入ることであり、その運動の中で内側からその行き過ぎを制御し抑制する「予防的方法」、端的に言えば常套句「lieu common」を真に「共有的」⁽¹⁰⁾にする」方法、言語が意味を持つときに無意識に作動している「共有された修辭学」⁽¹¹⁾と呼ぶべきものを作り上げていくことなのだ……。

しかしながら、文学が機能するときにはすでに通過しているものを言語で捉えようとするこのポーランの執拗な努力は、結局のところ、修辭学の刷新という試みにおいて、非言語的な思考や精神の光の下で過剰な修辭を排除するテロルの運動とほとんど見分けがつかないものになってしまっているのではないだろうか。『タルブの花』はこう結ばれる。「最後に私は何も語らなかったと記しておこう」⁽¹²⁾。文学を沈黙から救い出す方向を力強く指し示すかに思えたこの著作は、結論部において、あたかも自らの雄弁に突如として不安を覚えたかのように、著者自身の筆先で、沈黙への言及と共に投げ出される。ブランシヨは、この特異な身振りに引き寄せられるように、自らの評論活動を開始する。彼は、まさにこの箇所に「読者を不安にさせ、自らの歩みを辿り直すことを強いる前言取り消しの言葉」⁽¹³⁾を読み取りつつ、文学の可能性を問う独自の論点を重ね合わせていく。文学の可能性を問うポーランの議論には、作家の営みを不可能にしてしまう危険な要素が隠されているのではないだろうか。『タルブの花』は、議論を文字通りに追っていく通常の読解の背後に、「もっとと難解でもっと危険なもう一つの試論」を隠し持っているのではないか⁽¹⁴⁾。文学を危機から救い出すという目論見は、その論理の果てに、自らが救い出そうとしているものの破壊の可能性を内包しているのではないか。テロルの排除は、まさにその純粋性において、文学そのものを消滅させてしまうのではないか……。

『タルブの花』を読み終えても結局秘密は明かされず、この不安が解消することはない。私たちにできるのは、テクストに立ち戻り、謎を解く鍵を探し求めることだけである。常套句を回避するテロリストの手法のうちには、二つの異質な方向性が存在している。一方は、いかなる常套句によっても表現しえない主題を語る方向性であり、他方は、言語表現そのものからあらゆる常套句を排除しようとする方向性である。前者は言語を思考の独自性に服従させることを目指すが、後者は、意味やメッセージの伝達という「散文的運命」から言語の力を解放し、日常的表現を越えた交流〔communication〕の可能性を探求するものである。いずれにしても、ポーランが述べているように、テロリストたちは言語と思考の分断という錯覚に陥っているのであり、この錯覚が雲散霧消してしまえば、彼らの試みは最終的に「沈黙のうちに」消え去ることになる、という点をブランシヨは認めている¹⁵。重要なのは、この錯覚を解消しつつ、新たな観点から従来の修辞学を見直すことになるだろう。しかし、ブランシヨはここで「それなりに重大な二つの指摘」¹⁶を挿入する。一つは、ポーランが批判するテロルというものが、ある種の文学的潮流が持ちうる傾向というよりは、「ほとんど文芸の全域を覆うものであり、文学そのもの、あるいは少なくともその本質をなしている」という点である。したがって、テロル否定の姿勢は、文学それ自体の否定に他ならないということになる。もう一つは、たとえその試みが錯覚に基づいているとしても、それでもテロリストたちは活動を続け、文学作品を残したという事実は残されるという点である。これらの作品をテロルとして排撃することは、文学の在り方を断定し、その可能性を縮減することである。これは、紋切り型に服従する怠惰なる精神を抹殺しようとするテロリストの挙動と見分けがたい行いではないだろうか。ブランシヨは、最終的には、常套句の共有化によって言語と思考の錯覚的分断を回避する修辞学を復興するというポーランのプロジェクトのうちに、ある種の「コペルニクスの転回」を認め、その本質を「もはや言語だけに思考の周囲を回転させるのではなく、思考がその真の本性を取り戻すために言語の周囲を回転するに至るような非常に精密で複雑な別のメカニズムを想像すること」と喝破する¹⁷。しか

し、同時にブランシヨは強調する。この「想像」は可能であるが、実現されることはない。「それこそが言語の秘密であり、ポーラン氏の秘密でもあるのだ」⁽¹⁸⁾。覚醒は錯覚を解消し、文学それ自体を無化してしまふだろう。錯覚からの覚醒を夢想するときにのみ、私たちは錯覚の中で、そして根源的な危機を前にして、再び文学の可能性を問うことができるのである。ブランシヨはここで、錯覚と覚醒、汚染と浄化の区別が機能しない境域のうちに、自らの言説を維持しようとしていると言えるだろう。

3、神秘

最終的な一步を踏み出す前に立ち止まり、歩んだ道のりを際限なく辿り直し、そうやって秘密のうちに留まりながら問い直し続けること。このとき、私たちは、ポーランに従って文学的テロルを名指し、排撃するのではなく、テロリストたちの試みのうちに、ポーランが求めていたものを読み直す好機を手に入れることができる。上記のテキストから数年を経て一九四六年に発表された「文学における神秘」において、この試みは反復されることになる。ブランシヨは『タルブの花』冒頭の「ひとはしばしば詩や文学の神秘について語る」という一文を取り上げ直し、「文学における神秘は、おそらく尊重すれば損なわれ、捉えれば逃げ去るといった性質を持っている」と注釈したうえで、⁽¹⁹⁾ポーランの言語論を大胆にもマラルメの言葉に接続していくことになる。

したがって、あらゆる言語、あらゆる詩は、これら二つの要素、すなわち意味と音、観念と語句から出発すべきであると断言するとき、ポーランの素朴さは非常に考え抜かれたものである。「……」マラルメはこう述べている。「純粹な作品は、詩人が言葉に主導権を譲り、声を失うことを含意している」。しかし、こうも述

べている。「詩は創造することにある。心の中に絶対的に純粹な状態と輝きを持たねばならない」⁽²⁰⁾

先に見たように、ポーランによれば、言語とは、それが十分に作動し、思考が意味をなすかぎりで姿が見えなくなるものであり、そうであればこそ、語句の形式性を純化させたり、その物質性を二次的なものとして排除したりするのではなく、むしろ思考が自らを実現させるための中心点として言語のシステムを扱う新たな修辭学が求められることになるだろう。しかし、一見すると言語の形式的側面に過度に注意を向ける詩人は、まさにその過剰性において、限界において、言語のうちに生きる思考の動きを解放するに至るのではないだろうか。詩人は、自らの思考よりも言語の物質性を磨きあげ、作品の存在を純化することによって、逆説的にも思考の自由（「絶対的に純粹な状態」）を獲得するのではないだろうか。ポーランが言うように、紋切り型を排除するのではなく、それを内側から創造し直すとき、作家は何かを語ることができるのだとすれば、言語の形式的な側面を排除せずに、その法則に厳密に従うときに、詩人は自らの言葉に絶対的な觀念を宿することができるだろう。語句が意味を持つとき、語句の存在は忘れ去られる。しかし作家は、何かを表現するために、忘れ去られるべき語句を生み出し、洗練させねばならない。ブランシヨによれば、「消え去ってしまうとしても、語句は依然として非常に現前し続けているのである、事物の背後に姿を消すものとして、消滅することによって事物を出現させるものとして、私たちは絶えずそれを感じ取らねばならない」のである⁽²¹⁾。

もっと言えば、作家は語句によって事物を出現させるというだけではないのではないだろうか。ここでブランシヨは、ポーランを引き合いに出しつつ、マラルメの言葉を借りて、ポーランが語らなかつた言葉を語ろうとしている。「存在するどころか、事物は存在せず、自らの不在である、とマラルメは私たちに語る」⁽²²⁾。作家の言葉は、自らの消滅によって何事かを表現しつつ、觀念的存在として私たちの前に留まり続け、その何事かを露わにすると同時に、

それを自らの影に隠蔽してしまう。ここに、詩人の言葉の絶対的な正確さと、その絶対的な曖昧さがある。その語句は確かに何事かを言い当てているが、それがまさに存在の厚みに触れるものであるからこそ、それは別の語句に置き換えられねばならず、この置き換えは無限に継続されねばならない。詩的言語が喚起するのは、事物であると同時に、あらゆる事物の不在という出来事そのものであり、あるいは現前と不在の同時性という不可能な出来事なのである……。ここでブランシヨは、ポーランが語ろうとしたことを補強するのではなく、むしろその表面的な一貫性に執拗に抗う要素を暴き出すために、マラルメの言葉を召喚しているのだ。

語るという行為が何も語らないことと重なり合っているのだとすれば、『タルプの花』の最終的な沈黙は、まさにこの逆説的な事態を「尊重すれば損なわれ、捉えれば逃げ去る」神秘のうちに留める仕草だったと言うことができるだろう。テロルの暴力性を忌避し、語句の共有可能性へと立ち戻ることを主張したポーランの著作は、不可避免的に、何事かを語る文学の言葉を、事物の不在性の開示という空虚な「真理」へと導いていく。文学とは、作家が読者に差し向ける言葉である。言葉が届くとき、その語は意味を持つ。語句を越える観念もなければ、意味を持たぬ語句も存在しない。作家と読者は、共有された常套句という場において、共にこの意味を目指して語句に向かっていく。しかし、こうして共有されるのは、理念的意味のうちに自らを表現する事物である。文学は、言語の透明性においてこれを語る。それに対して日常的言語は、曖昧な仕方でこれを流通させる。共有され、制度化された意味は、確実で永遠ですらある。しかし詩的言語は、散文的な意味から逃れる存在の特異性に耳を澄まし、語句を置き換え、不安定な彷徨の中で、あらゆる事物の不在を意識し続ける。作家は見事な言葉で存在を出現させるが、同時に、自らの言葉を沈黙に投じねばならない。作家の自由は、誰のものでもない「原初の言語」²³の破滅的な運動に巻き込まれているのである。

文学の言語は、語る者の自由と区別されることは望んでいないが、同時に、非人称の言葉の力を獲得し、「単独で自らを語る言語」の存続を望む。それは事物であり、自然であり、またそうしたすべてを崩壊させる意識である。²⁴

作家はすべてについて自由に語るが、「原初の言語」のうちで自発的に語る権利を剥奪されるだろう。詩的言語は、自らの不安定性において、この非人称の言葉へと接近し続ける。マラルメが「花」と言うとき、そこに呼び出されるのは理念的的存在としての「花」であり、そうした「花」を消滅させる力、つまり「あらゆる花束の不在」なのである。日常的言語は、曖昧な仕方でも何事かを語る。しかし詩的言語は、絶対的な仕方でも、現前と不在の解消しえぬ曖昧さを語るものである。詩人の言葉は、日常的言語より豊かなのではなく、極度の貧しさのうちに誰のものであるでもない言葉を語ろうとしているのだ。ポーランとマラルメを並べて語るとき、ブランショは、文学の可能性を論じるポーランの豊穡な言説の内部に、暗黙のうちに表現の絶対的な不可能性へと向かう破滅的な方向性を指し示すことによって、自らの文学論の姿勢を極度の曖昧さにおいて打ち立てていると言えるだろう。ブランショにとって重要なのは、文学の可能性を体现する決定的な言説を打ち立てることではなく、あらゆる言語活動のうちに忍び込み、その試みを破綻させる不安な要素を明らかにすることによって、逆説的に、言語それ自体が持つ「単独で自らを語る」力を引き継ぎ、存続させることなのだ。だからこそ彼は、作家としても散文形式を選択し、書物と断章の間を揺れ動きながら、マラルメ以上にカフカについて絶え間なく論じ続けることになるのであって、それは、そもそも詩的言語というものが、自らの絶対性を裏切りつつ、散文か韻文かという形式的な二分法を攪乱する仕方でも語られるものだからなのである。

上記のテキストと同時期に発表された「エイトレの矛盾」において、ブランショはポーランの散文作品に触れ、

「文学の最も古い願いの一つ」は、「沈黙に達するために書くこと、沈黙を乱すことなく書くこと」だと述べている。⁽²⁵⁾書くことは何事かを語ることであり、同時に、あらゆるものの不在を語ることである。沈黙するということは、何も語らないということではない。日常的世界においても、沈黙はむしろ雄弁に何事かを語るだろう。その意味では、沈黙とは言語の単純な反対物ではなく、むしろ言語の一部分というべきものである。しかし、作家が目指すのは、沈黙が示すいわば紋切り型としての共有可能な意味ではない。沈黙にはより根源的な働きがある。それは、選択された言葉の周囲にまわりつき、語られた事物の不在を語ることによって、その言葉を消し去る「原初の言語」の働きである。

私は語る。しかし、私が述べるものが、私が指し示す事物の周囲に空虚を発生させ、この事物を消し去る瞬間に、私は沈黙する。私は遠い不在を指し示してもいるのであり、あらゆるものが、私の言葉さえも、そこに沈んでいくことになる。こうして、語句を用いて沈黙を作り出すという希望と錯覚が形成されるのである。⁽²⁶⁾

作家は沈黙を破って自由に語り始め、何事かを語るために言葉を並べ、言葉に裏切られつつ、語句を手放しながら書き続け、ついには「原初の言語」のうちで、沈黙を乱すことなく、沈黙によって書くに至るのである。神秘の曖昧さが文学の可能性であったとすれば、沈黙こそがその開始点であり、到達点なのである。言語はいかなる限界をも持たずに、すべてを語る。だからこそ作家は、自らの自由をそこに賭けることができる。しかし、「私たちはどこから語り始めるのか」と問うとき、私たちは自由の起源の問題に直面している。それは文学の問いであると同時に、哲学の問いでもある。メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』において、私たちが世界内に身を置きつつ、いかにして世界に条件づけられながら世界を構築しているか、いかにして状況の中で自由を実現しているかを論じてい

る。私たちは絶対的に自由な思考として世界に到来するわけでもなければ、世界という機構に完全に組み込まれた決定論的存在というわけでもない。私たちは、いわば現前と不在の曖昧さの中で、客観的対象としての自己を認識し、生きる主体としての自己を発見していくのである。言語とは、私たちの実存が世界を表現していく仕方にならないのだ……。ブランシヨは同時代の哲学者のこのような表現論について、「明らかに、ここでは記述が文学的夢想と同じほど先まで進んでおり、沈黙が同じ特権的地位、つまり第一の地位と、同じ優位性、つまり自らが生み出す言語活動の保証人として現れるという優位性を受け取っている」と評している²⁷⁾。そして、あたかもこの簡潔なコメントで言葉は尽くされたとしてもいうかのように、ブランシヨは文学の開始点についての自らの問いに立ち返っていく。とはいえ、「文学的夢想と同じ」という通りすがりの評言は、哲学を再起動させようとする同年代の哲学者の果敢な試みに対する軽い目配せだろうか。むしろブランシヨの身振りは、その慎ましい外観に反して、哲学的言説が生息する普遍的雰囲気を遠くから攪乱するものであるようにも見える。ブランシヨは哲学者として議論を進めているのではない。彼はむしろ、哲学を問いに付しているのだ。それは、当時メルロ＝ポンティが向かおうとしていた方向性を支持するというよりは、その困難さを助長し、自らが直面している解消しがたい問いのうちに巻き込む危険な身振りだと言えるのではないだろうか。言及の短さは、哲学的企図との近接性を指し示しつつ、暴力的な仕方²⁸⁾で、そこに案に含まれている破滅的な要素を薄暗く暗示しているかのである。この束の間の交叉点に、しばらく立ち止まってみることにしよう。

4、沈黙

一九四五年に発表された『知覚の現象学』は、その序文において、自らの任務を「世界の神秘と理性の神秘を開

示すること」とし、フツサルを起点とする現象学の営みを、芸術家たちの努力と直接的に重ね合わせている。「現象学は、バルザックの作品、プルーストの作品、ヴァレリーの作品、あるいはセザンヌの作品と同じように、不斷の辛苦である」⁽²⁸⁾。神秘についてはジョルジュ・ギユスドルフに負うものだと言われ、ブランシヨはもちろん、マラルメやポーランも参照されていないとはいえ、『NRF』誌に代わって文壇を支配することになる『現代』誌の創刊に向けてサルトルと歩みを共にしていたこの哲学者が、かくも高々と発したこの宣言のうちに、『タルブの花』を端緒とする文学的言語の可能性を巡る議論の少なくとも反響を聴き取ることは許されるだろう。あえて言うならば、メルロ・ポンティがここで目指しているのは、言語と思考の錯覚的分断を問い直すことで文学の新たな方向性を切り開くポーランの試みに呼応する形で、哲学的文脈における精神と物質の二元論を批判的に解体し、沈黙のうちで世界そのものの出現と重なり合う新たな哲学的言説を手に入れることである。哲学は、日常的言語の曖昧さを払拭し、世界についてより明晰な認識に立つことを目指す。これは、一見すると言語の曖昧さを絶対化させようとする文学的言語の営みと対立するものに見える。しかしメルロ・ポンティによれば、現象学とは、まずは還元を通じて主体と対象の分断の手に立ち返る作業であり、その意味では、ある種の曖昧さにおいて、既存の言説が作り上げてきた世界の安定的な描像を揺るがすものなのである。

反省は、世界の根拠であるところの意識の統一性に向かうために世界から引き下がるのではなく、諸々の超越が湧出するのを見るために後退するのであり、私たちを世界に結びつけている志向的な糸を出現させるためにそれを緩めるのであって、それだけが、世界を異様で逆説的なものとして開示するがゆえに、世界についての意識となるのである⁽²⁹⁾。

哲学的反省は事物から離れることによってその生命を回復し、遠くからその意味をつかみ取る。一見すると、対象から適切な距離を取るによって、客観性を持った表現を整えることができるという単純な事実が述べられているにすぎないように思える。しかし、世界との結びつきを語るために、最初、それを緩めねばならないとすれば、哲学はまさに距離を取ることによって、初めて、自らが語る内容と向かい合うことができるということになる。もつと言え、哲学は、何も知らないまま何かを「緩め」、その結果として自らを縛る「志向的な糸」を発見するということになるのではないだろうか。現象学的哲学の新しいプログラムは、すでに表現の問題全体を巻き込んでいる。私たちは、「対象」についての説明を整理する前に、まずはそれを発見せねばならない。哲学の開始点には沈黙があり、危険な跳躍がある。私たちは何も知らずに、ただ手元に残されている言葉を駆使して、何事かについて語り、説明し、解明せねばならないのだ。

原初的な意識の沈黙において、語句の言わんとすることだけではなく、加えて、事物が言わんとすることも現れてくるのが見られる。意味作用のこの第一次的な核の周囲に、命名行為や表現行為が組織されるのである。⁽³⁰⁾

現象学は、この「第一次的な意味の核」にたどり着こうとする努力である。しかし、それは哲学的言説をより堅固な土台の上に立て直すことではない。「事物が言わんとすること」にたどり着くということとは、まず自らの言説を手放すということであり、この沈黙において、再び語り始める力を探し求めるということである。現象学は、本質の名のもとに事物の理念的意味を明らかにする。しかしそれは、その本質を、それが打ち消した事物の存在において不断に問い直すためである。だからこそメルロ＝ポンティは、「現象学の未完結性」⁽³¹⁾について、それを現象学の欠

陥ではなく、その言説の存在そのものと見なすのだ。語るためにこそ沈黙し、手放すことによって意味を手に入れるというこの試みは、まさに「原初の言語」の逆説性に付き従おうとする詩的言語と重なり合うものである。確立された真理について語られた言葉を反復するのではなく、言説としての自らの存在の内部から語るべき真理を発生させることが現象学の目論見だとすれば、知覚と同様に言語もまた、すでに哲学の一分野である以上に絶えず回帰すべき端緒だということになるだろう。その意味では、『知覚の現象学』の中央部に置かれた「表現としての身体と言葉」の章は、この著作を支える思考が自らの存在を問い直しつつ、繰り返しその周囲を回っている中心点に他ならない。ブランショが注意を向けているのも、まさにこの地点である。

メルロ＝ポンティの表現論において探求されるのは、言語と思考を切り分け、前者を客観的対象（「語詞イメージ」として分析したり（経験論的心理学）、後者を語句の背後に存在する心的機構として分析したりするのはなく（主知主義的心理学）、「語句が意味を持つ」という事実を一挙に原初的なものとして把握する仕方である。思考とその道具である言語が存在するのではなく、思考は言語によって思考になるのである。「事物の命名は、認識の後にもたらされるのではなく、まさに認識そのものである」とメルロ＝ポンティは述べている。³²命名とは、思考に語句を割り当てる作業ではない。私たちは、命名という行為を通じて、自分が語っている事物を知るのである。知っていることを口にするのではない。語ることを通じて、何事かを知るのである。言葉に内在する「所作的意味」³³が、知的で概念的な把握を支えていると言うべきであろう。言語を利用し、言語の物質性に裏切られる精神が存在するわけではない。精神の力で不活性な語句に息吹を与える必要もない。言葉の独創性や特異性は、言葉そのものに宿っているのだ。思考の意味とは、言語の形態、リズム、色合い、テクスチャーに他ならないのである。「私が語句を知ってそれを発音するためには、その語句を自分に対して表象する必要はなく、その語句の分節的で音声的な本質を、転調の一つ、つまり私の身体の可能な使用法の一つとして所有すれば十分である」³⁴。意味とは発せられた言葉の

内面であり、現前する語句は思考の外面なのであって、二つの側面を切り離すことなどできない。言語とは表と裏の瞬時の交替であり、逆説的な同時性の現象そのものである。

さて、言語の起源に思考の自発性を置くことができないとすれば、私たちはどのように語り始めるのだろうか。そもそも思考が言語に内在するのであれば、いったい「誰」が語り始めるのだろうか。メルローポンティは答えるだろう。語り始めるのは、言語それ自体である、と。私たちはすでに言語の内部に生きており、周囲で語られている「転調」することによって、何事かを語るのだ、と。私たちはすでに言語の内部に生きており、周囲で語られている諸々の言葉を組み立て直し、「分節的で音声的な本質」の筋道を身体的にたどり直す作業を通じて、表現のシステムの内部に意味を生じさせるのである。語る前に意識は存在しない。存在するのは、すでに作動している言語のうちで沈黙するコギトの影だけである。私たちは、「偶然」としか言えぬような仕方では沈黙を破り、すでに何らかの意味を手に行っていることに気づくとき、初めて存在し始めるのである。

話すことを学ぶ幼児であろうと、はじめて何事かを語り考える作家であろうと、最後に、ある種の沈黙を言葉に変形するすべての者の場合であっても、表現や意思疎通の中にある偶然性について、私たちはもはや意識しない。「……」したがって、その根源にまで遡らないかぎり、言葉のざわめきの下に始原の沈黙を見出さないかぎり、この沈黙を破る所作を記述しないかぎり、私たちの人間観は表面的なものに留まるだろう。言葉とは一つの所作であり、その意味一つの世界なのである。¹⁵⁾

私が言葉を語るとき、言葉は誰のものでもない。幼児が音声の無意味な羅列から突如語るべき言葉を見つけ出すように、言語はあるとき「偶然」に意味をもたらす。私は語る者になるのだ。それは私の権能には属さない力であ

る。私は自分の言葉を、身の回りで語られていた他者の言葉の中から借りてきたのだ。答えを知らぬまま、降りかかった問いかけに応じるようにして、私は自分の身体を調整し、言語システムを転調させ、世界とのある種の関係性を固定化し、対象に向けられたまなざしとして自らを確立するに至る。メルロ＝ポンティによれば、「あたかも他者の意図が私の身体に住まうかのように、あるいは、私の意図が他者の身体に住まうかのように」事態は推移するのだ。³⁶ここで私と他者は、メッセージを伝え合う存在として向かい合っているのではない。二つの孤立した存在に先立って、両者の間の関係性が生起するのだ。誰のものでもない身体を通じて、誰のものでもない言語が姿を現し、語る者と聞く者の間に意味を結実させるのである。非人称的な言葉が、語るべき内容を生み出し、それにふさわしい形式を求め、その場に存在する人間に意味を与えるのである。語る行為によって、語句が存在し、私たちが存在する。ここにこそ真の実存があり、実存における真の超越があり、真の交流がある。しかし、「始原の沈黙」を破るこの言葉は、あくまで誰かの身体において発せられる。それは、上空から存在の総体を俯瞰する絶対的意識の到来ではない。存在を語る言葉は、あくまで存在のうちに組み込まれた身体において、あたかも波間に生じる波のように語り始めるのだ。

あるいは、語る言葉と語られた言葉を区別することができるのかもしれない。〔……〕存在の充実の中に不断に創造されるこうした開口部が、幼児の発する最初の言葉や、作家の言葉を、概念の構成と同じく語句の構成を、同じように条件づけている。以上が、言語を通して看破される働きであり、これが繰り返され、自身を支えとするのだ。あるいは、波のように、寄せてきて自分を捉え、やがて自分自身の彼方へと自分を投げ出してゆくのである。³⁷

言語は、存在のうちで、存在へと超越する。メルロ＝ポンティの現象学的思考が差し向けられ、最後まで留まろうとするのは、「始原の沈黙」が自らを打ち破る所作、沈黙の内なる超越とも呼ぶべきこの一步である。ブランショも同じ地点に立ち、この運動性に巻き込まれながら、文学の可能性を巡る問いかけを継続していくだろう。しかし二つの道は、ここで交叉しながらも、再び離れていくようである。別離をあらかじめ含むことのない交叉など存在しない。彼らにおいては、それが別離を巡る別離である以上、事は思いのほか深刻である。

5、死

文学作品を読むとき、私たちはそこに語られている出来事にリアリティを認め、登場人物たちの振る舞いを「経験」する。文学の言語は自らの存在を忘れさせ、共有された場において出来事の意味を語る。初めは異質でよそよそしい語句の羅列が、いつしか身体のリズムと同期して、生き生きと存在を描き出し、その変転を物語る。しかし文学の言語は、その「経験」が虚構であることを忘れさせるわけではない。その言葉は、通常の言語活動から溢れ出し、経験的世界に抵抗する。文学は、日常的言語が曖昧な仕方で表現するものを、洗練された透明な散文によって表現する。私たちの身体から生まれ、私たちの間で交換される言葉が、理念的存在を獲得し、世界の内部で世界について語るに至る。作家の発意によって選ばれた語句は、実は「始原の沈黙」を破る非人称的な言葉によって支えられているのである。こうして言葉は、それが言わんとすることを超えて、「事物が言わんとすること」を表現するに至る。メルロ＝ポンティが、自らの現象学的言説を文学的言語と重ね合わせるとき、そしてそれを「不断の辛苦」と呼ぶとき、彼が想定しているのは、始原に留まり続けるこの沈黙の表現という逆説がもたらす困難であり、にもかかわらず、私たちが内在的な超越を実現し、この困難を乗り越え続ける存在であるという事実に由来する希

望である。

哲学的言説が、自らを文学的言語に重ね合わせるとすれば、その言葉は、自らの消滅において何事かを語り、事物の不在を語るために存在するという逆説性を引き受けねばならない。詩においては、私たちは世界に連れ戻されることはない。哲学的言説もまた、「沈黙の始原」から何事かを表現しようとすれば、自らが語ろうとする世界から遠ざかり、自らも沈黙に沈み込んでいくことになる。世界について語るといことは、言語が自らの濃密さのうちに孤立することであり、世界を喪失するということ、しかも絶対的な仕方で喪失することではないだろうか。超越は死の断絶を意味するのであり、そうでなければ、結局何も語られなかったことになるのではないだろうか……。メルロ＝ポンティは、語ることの始原を巡るこの危機を受け入れつつも、この否定性を絶対的な虚無と見なすことを拒否する。彼が繰り返し述べているように、世界について語るとき、充実した存在に対して虚無が到来するのではない。そう考えることは、精神と物質、思考と言語の分離という例の使い古された二元論的錯覚を復活させることではない。言葉はつねに、すでに語られた言葉のうちに語り始める。自己意識としてのコギトが語り始めるとき、世界の内側でそれを支えている「沈黙するコギト」⁽³⁸⁾がすでに存在しているのだ。言語が何事かを語るとき、その主体は物質的条件を離脱した絶対的精神ではなく、言語の物質性そのものである。命名行為において語句が意味を持つとき、身体のうちで、コギトの沈黙において、世界の内側に語る言葉と語られる事物の分断が生起する。語ること、命名することは、言葉を発する身体が二つの位相に裂開することである。そこに差し挟まれるのは、絶対的な虚無ではない。表現の到達点にあるのは、その開始点である身体に他ならないからだ。言葉は波間に生まれ、波間に消えていく。同じ時間の中で、思考は自らを脱し、再び自らの現前を見出すのである。語るということは逆説的事態であって、私たちは自らを言葉のうちに見失うことを通じて、語る者として実存するに至るのだ。

もはや私は無であるふりをしたり、絶えず無から出発して己を選ぶふりをしたりすることはできない。主体性によって世界のうちに無が出現するのだとしても、無が存在に到来するのは世界によってであると言うことができる。「……」確かに私はどの瞬間にでも自分の企図を中断することができる。しかし、この能力は何か。それは、他の何事かを始める能力なのである。というのも、私たちは決して無のうちに宙吊りになっているわけにはゆかないからである。私たちはつねに充実のうちにあり、存在のうちにある。それはちょうど顔というものが、休んでいるときでも、死んでしまっても、いつまでも何事かを表現するように余儀なくされているのと同様である（……）。また、沈黙がなおも音声的世界の一樣態であり続けるのと同様である。³⁹

語ることによって、私たちは存在の外部に超出するわけではない。そのような絶対的自由は幻想にすぎない。私たちはむしろ、語るという行為がはらんでいる超越の運動のうちで、再び存在を見つけ直すのである。しかし、表現の永続性（死後も存続する顔）について語るメルロ＝ポンティの言説には、どこか不安を誘うものがある。言語が語るのであって、私たちが語るのではないとすれば、「事物が言わんとすること」を表現する言葉が積み重ねられていく中で、再び「他のことを始める能力」はどこに由来するのだろうか。語る者の死をも横断していく言語のこの恐るべき力は、どこからやって来るのだろうか。そして、死者の顔が何事かを意味し続けるとしても、その者の死という出来事は永遠に沈黙し続けるのではないだろうか。だからこそ、私たちは再び語り始めねばならないのではないだろうか。沈黙を語る哲学者に対して、言語は空虚と共に始まる、とブランショは言うだろう。一九四八年に発表された「文学と死への権利」では、命名行為の「不安を覚えるような驚異」についてこう述べてられている。

語句は、それが意味するものを私に与えてくれるが、まずそれを抹殺する。私が『この女』と言えるためには、私は、何らかの仕方で彼女の生身の实在性を奪い、不在にし、無化せねばならない。語句は私に存在を与えてくれるが、存在を奪われたものとして与えるのである。語句とは、この存在の不在、その無、存在を喪失したときに残されているもの、すなわち、存在していないという唯一の事実なのだ。⁽⁴⁰⁾

存在者について語り、世界について語るとき、私たちはそれを理念的次元において現前させつつ、その不在に投げ出されている。私たちは、確かに存在の充実のうちに留まりながら、存在を語る運動性に身を委ねているが、ブランショによれば、まさにその試みが達成される極点において、語る者は自らが語る世界の消滅を生きているのである。文学だけが、この逆説に付き従う。日常生活の中でこの感覚は呼び起こされることはない。文学の言葉は断えず遠ざかり、私たちは世界のうちで、他者と共に実存し続ける。しかし、事物の抹殺というこの根源的出来事それ自体は抹消されえない。なぜなら、言語によって距離を取ることによって、観念の抽象性において、初めて私たちは存在のうちに身を置くことができるからである。哲学的言説は、概念によって、概念の運動（弁証法）としてこの運動を掬い取ろうとするだろう。それに対して、詩的言語が留まろうとするのは、概念の背後に身を退いていく語句の物質性であり、語られた存在の絶対的な不安定性である。存在の内部で「他のことを始める能力」について語る哲学者の言葉を裏返すかのように、ブランショはこう記している。

したがって、まさに次のように言うのが正しい。私が語るとき、私の中で死が語るのだ、と。私の言葉は、死がまさにこの瞬間世界に放たれ、語る私と、語りかけられている存在との間に、不意に立ち現れたことの告知なのである。死は、私たちの間にあって、私たちを隔てる距離のようなものだが、この距離はまた、私

たちが隔てられることを防ぐものでもある。「……」死は語句の中にあつて、その意味の唯一の可能性である。死がなければ、すべてが不条理と無のうちに崩れ去ってしまうだろう。⁴¹

言語があり、個々の存在の死を乗り越えていく溢れんばかりの充実がある。命名行為において、私たちは事物を出現させる。文学とは、存在への自由な決断である。語られることによって、事物の存在に光が当たる。抽象された観念を通じて、私たちは理解し、語り合う。しかし、そこに輝いているのは、実は言葉によって抹殺された存在が放つ鈍い光なのだ。それは、その言葉だけが責任を負う、何ものとも交換しえない特異性の輝きなのである。何かに命名することによって、その事物は輪郭を持ち、共有可能な財産として交換される。言語は存在に生命を与える。しかし、言語は出来事の唯一性を抹消するものでもある。詩的言語としての文学は、沈黙のうちに投げ出された消去不可能な存在に、あるいは消去不可能ものの消去という不可能な出来事に留まろうとする。文学が何事かを語りつつ、語り直し、矛盾し、ついには何も明確にしないのは、存在について語ることに失敗しているからではなく、むしろ存在それ自体が、自らを語る言葉のうちに無数の別の言葉を見つけ出し、自らを引き裂きながら曖昧に輝くからなのである。文学が、その「不断の辛苦」によつてもたらずものは、生であると同時に死であり、絶望であると同時に希望である。それは、存在それ自体が孕む両義性であり、距離と接触の同時性である。あたかも文学は、存在から最も離れた場所で、最も深く存在に触れるかのようなものである。そして、あたかもブランシヨは、メルロ・ポンティから遠ざかることによつて、まさに彼が言わんとしていたことを言葉にしているかのようなのである。そうだとすれば、メルロ・ポンティの現象学的思考は、「始原の沈黙」に注意を向け続けながら、自らが語ることのない「死」について語るブランシヨの言葉を引き寄せつつ、それを打ち破る原初的な言葉を巡つて、自らを見失う危険な曖昧さの中で、誰のものでもない言語のもとで何事かを語り続ける試みだったのだと言えるだろう。

6、おわりに

書くということはどういうことか。いかに読まれるあてのない無名人士の繰り言であろうとも、そこには何事かが語られている。沈黙や書き損じすら、何事かを意味するのだ。ましてや作家であれば、自らの思考とその表現を切り分け、後者から使い古された紋切り型を排除することによって、前者を際立たせねばならないだろう……。純粹な絶対的精神に不純な言語を服従させるこのような考え方を、ポーランはテロルと呼び、文学から可能性を奪う悪しき傾向だと断ずる。純粹な思考、純粹な言語を過度に追い求めるとき、文学は語るべき言葉を見失い、沈黙するにちがいない。意味は言語の外部ではなく、その内部に宿るものである。重要なのは、常套句を排除することではなく、その使い方を学び直すことであり、修辭学を捨て去るのではなく、思考と言語を共に再活性化させるような新たな修辭学を作り上げることである。ブランショは、この試みをマラルメの詩論と接続することによって、文学の可能性の問いそのものを決定的に不安定化させる。言葉によって何事かを語ること、事物を出現させることは、その事物の不在を証言することである。文学が可能であるということとは、作家が沈黙のうちに身を置いているということである。語るために沈黙すること、沈黙に向けて語ることこそ、文学の第一の願いである。ここでブランショは、沈黙を破って言葉を発する働きを、身体における「所作的意味」の発生に立ち戻って思考するメルロ＝ポンティの現象学的思考に接近する。純粹な思考ではなく、語句が意味を持つ。言語の物質性のうちに、意味が宿る。身体が語る。言葉が何事かを語るとき、存在が存在に向けて超越するのだ。語るということは、この非人称的な言語活動に身を委ねることであり、存在が自らを語る仕方に耳を傾けることである。しかし、ブランショの思考は、存在から存在へのこの内在的な飛躍のうちに、死の断絶を読み取る。現前に留まりながら超越を語ろうとする哲学者に対して、文学者は自らの言葉が否応なく残す曖昧さや神秘に傾斜し続ける。沈黙において語句が意味を持つのだが、

このとき語句が示すのは事物の不在でしかない。しかし、だからこそ作家は書き続けるのであろう。意図を越えたこの逆説性だけが、「始原の沈黙」を打ち破る真の創造性なのだろう。こうして、哲学的言説は文学的言語を引き寄せつつ、そこに自らが語ることのない言葉を見出すのだ。

一九四〇年代のブランショが、どのような意図を持ってメルロ＝ポンティに言及したのかは定かではない。彼については、サルトルとの「敵対」やレヴィナスとの「友愛」が語られることはあっても、メルロ＝ポンティとの関係がいかなるものであったのかについては、主題的に扱われることはほとんどない。とはいえ、メルロ＝ポンティへの言及が含まれた「エイトレの矛盾」は、「文学と死への権利」を末尾に置く重要な論文集である『火の部分』に収められているし、ここで指名された哲学者はコレージュ・ド・フランス教授就任直後の講義において、この論文集を積極的に活用することになる。またブランショの方も、メルロ＝ポンティの追悼に当てられた雑誌の特集号に「哲学的言説」と題された一文を寄稿することになる。こうした事実は、両者の関係性が、はっきりと規定されない曖昧な仕方で存続していたこと、文学者が哲学的言説に接近したのか、あるいは哲学者が文学的言語を利用したのか判定不可能な距離感で保持されていたことを伺わせる。ブランショがどのようにメルロ＝ポンティの言葉を選び、どれほど遠くからそこに自らの言葉を添えていたのかを示そうとした本論稿の立場としては、それだけで十分である。このことだけで、存在について何事かを語ろうと思うのであれば、哲学は、文学と共に言語の本質的な不安定性に身を委ねねばならないということ、そうやって、存在それ自体のうちに沈黙に言葉を与え、自らの言説を中断する要素を受け取りつつ、語る権利を失うことによって、初めて普遍的なものについて語り直す好機を手に入れるのだということを感じ得ることができるからである。

注

- (1) 本研究は科研費（20K12797）の助成を受けたものである。
- (2) 著作としての刊行は一九四一年。
- (3) Jean Paulhan, « Les fleurs de Tarbes », in *Œuvres complètes Tome 3. Langage II*, Paris, Cercle du Livre Précieux, 1967, p. 20.
- (4) *Ibid.*, p.28.
- (5) *Ibid.*, p.41.
- (6) *Ibid.*, p.47.
- (7) *Ibid.*, p.52.
- (8) *Ibid.*, p.54.
- (9) *Ibid.*, p.67.
- (10) *Ibid.*, p.80.
- (11) *Ibid.*, p.82-83.
- (12) *Ibid.*, p.94.
- (13) Maurice Blanchot, « Comment littérature est-elle possible ? », in *Faux pas*, Paris, Gallimard, 1943, p.94-95.
- (14) *Ibid.*, p.92.
- (15) *Ibid.*, p.96.
- (16) *Ibid.*, p.97.
- (17) *Ibid.*, p.100.
- (18) *Ibid.*, p.101.

- (19) Maurice Blanchot, « Le mystère dans les lettres », in *La part du feu*, Paris, Gallimard, 1949, p.49.
- (20) Ibid., p.50-51.
- (21) Ibid., p.54-55.
- (22) Ibid., p.54.
- (23) Ibid., p.58.
- (24) Ibid., p.62.
- (25) Maurice Blanchot, « Le paradoxe d' Ayttré », in *La part du feu*, op. cit., p.66.
- (26) Ibid., p.71
- (27) Ibid., p.72.
- (28) Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945, p. 22.
- (29) Ibid., p. VIII.
- (30) Ibid., p.X.
- (31) Ibid., p. XVI.
- (32) Ibid., p.207.
- (33) Ibid., p.209.
- (34) Ibid., p.210.
- (35) Ibid., p.214.
- (36) Ibid., p.215.
- (37) Ibid., p.229-230.

(38) Ibid., p. 462.

(39) Ibid., p.515-516.

(40) Maurice Blanchot, « La littérature et le droit de la mort », in *La part du jeu*, op. cit., p.312.

(41) Ibid., p.313.